

ヤスクニ・レポ 307

三つの三原則

…原子力平和利用のための三原則、非核三原則、ロボット工学三原則…

小川 正明(日本基督教団小金教会・会員)

1.原子力平和利用のための三原則

1955年に制定された原子力基本法、第一章、第二条に基本方針として掲げられている。「原子力利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする。」

当時の日本学術会議が、いかにして政府による核開発の暴走を止められるかと議論して、基本法に民主、自主、公開の三原則を盛り込むことを強力に主張した結果実現したものである。

しかし、現実には民主的な運営とは思えないし、自主的かという点、東電福島原発のように、米国のメーカーの物を言われるままに導入している。同原発の非常用電源設備が地下に設置されていたのは、米国で頻発する竜巻被害を想定したもので、日本の津波への配慮は全くなかった。また、近年ではテロ対策上公開は難しいし、以前から重要な部分や、メーカー内で機密になっているものなどは、公開されることはないであろう。

2.非核三原則

1967年12月衆議院予算委員会で佐藤栄作内閣総理大臣が「核兵器を持たず、作らず、持ちこませず」という非核三原則を主張すると答弁した。

これは、1974年佐藤のノーベル平和賞の受賞に貢献した。

1976年4月衆議院外務委員会「政府は、核兵器(核燃料、廃棄物)を持たず、作らず、持ち込まずとの非核三原則が国是として確立されていることにかんがみ、いかなる場合においても、これを忠実に履行すること」。また同年5月参議院外務委員会でも「核兵器を持たず、作らず、持ち込まずとの非核三原則が国是として確立していることにかんがみ、いかなる場合においても、これを忠実に遵守すること」。これらは、核拡散防止条約批准の際の附帯決議としてなされたものである。Wikipediaより

今月11日、高市早苗内閣総理大臣は衆議院予算委員会での答弁で、国是とされてきた「非核三原則の堅持」を維持するとの明言を避けた。

3.ロボット工学三原則

第一条

ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条

ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条

ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

これらは、1950年アイザック・アシモフによって著された「われはロボット」というSF小説の中で初めて示されたそうである。

1955年に制作された映画に「禁断の惑星」というのがあった。ある惑星に地球からの調査隊が着陸した。この惑星には人間の親子、父と娘の二人と一台のロボットが住んでいた。その後、調査隊の一人が何者かに惨殺された。まず、このロボットが疑われたが、隊員の一人の証言によってロボットのアリバイが成立してロボットの疑いは晴れた。今度は、みんなの前に怪物が向かって来た。隊員たちは応戦するが、さらに近づいて来るため、父がロボットに命じてこの怪物を攻撃するように言ったが、なぜかロボットは命令に従うことができなかった。後で分かったことだが、この怪物は父が想像したものだった。ロボットはこのことを知っていたので、これを攻撃することができなかったのである。ここでは、ロボット三原則が機能していた。

時代は進んで1968年、「2001年宇宙の旅」という映画があった。この映画の制作に、初めIBM社が協力していたが、映画の中でコンピューターが人間を殺すことが分かって、全面的に撤退した。コンピューター・メーカーとしては容認できないということであろう。

現代では、AI(人工知能)が脅威となっている。各種ドローンが開発され、戦場でも、偵察、輸送、誘導、爆撃、

自爆など重要な働きをしている。

これらのドローンは、初めは人間がリモコンで操縦していたが、ここでもAIが取って代わろうとしている。たとえ現場にいらなくても、モニター越しに人間が目で見えて判断して攻撃し、その結果も確認することが出来る。人間であれば、状況によっては自ら傷ついたり、後悔することもあるはずである。これらの操作がAIによって行われるとしたらどうなるであろうか。ロボット三原則第一条に反することは明白である。

AIの脅威は多岐にわたる。学習することによって、人間の能力を超えることはチェスや囲碁、将棋の勝負で実

証されてきた。

人間と違って休養の必要もなく、時差ボケもない。24時間戦うことが出来る。偏った知識を学習させることも出来るし、ニセ情報を拡散することも出来る。

国連安全保障理事会は今年の9月、公開討論を行った。国連のグテーレス事務総長は近年の紛争はAIを使った自律システムの実験場になっていると発言した。

多くの国が規制の必要性を訴えたが、米国代表は国際機関による中央集権的な規制を拒否すると発言した。開発競争で優位に立つ米国の覇権を構築したいものと思われる。

2025 年 10 月 17 日奨励マタイの福音書 26 章 45～50 節「友よ何のために」 星出卓也（日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師）

ゲッセマネで主が深い悲しみに苦しみ悶えている間、主の弟子たちは、ずっと眠っておりました。何度も起こされ「目をさましていなさい」と命じられたにもかかわらず、弟子たちは主が悲しみ悶えておられる間眠り続けて、この事態に及んでも眠り続けている。そんな鈍感な弟子たちに主は「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」(45-46 節)と語ります。

以前は「わたしの時はまだきていません」と主は語りましたが、今はその「時」が来たのです。この時の弟子たちは、まるで目覚まし時計に起こされたお寝坊さんのように、この時を迎えます。この弟子たちと比べますと、この「時」を迎えられたイエス様の姿は対照的です。この「時」についてイエス様は「人の子は罪人たちの手に渡される」と受動態で語っていますが、イエス様のこの「時」に向う態度は完全に能動的で主体的です。確かにこの時、イエス様を暴徒に明け渡すのはイスカリオテのユダですし、イエス様の手を縛って連れてゆくのも祭司長に命令された役人でも、主は自分の意思でこの時に向っています。

先ほどまで主と弟子たち以外は誰もいないはずであった静かな園は、一変して大勢の人々の足音と、たいまつ明かりに囲まれて、騒々しさに包まれて眠り続けていた弟子たちも、その重いまぶたを開けなければならない状況となりました。「イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二弟子のひとりであるユダがやって来た。剣や棒を手にした大ぜいの群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、民の長老たちから差し向けられたものであった。」(47 節)

この時の群衆の中に剣を手にしたものもいたと書いてあるところから、剣を携帯することが出来たローマ兵の一隊がいたということが分かります。ローマの一個中隊 600 人の中のローマの歩兵部隊 200 人と思われます。更に

「棒を手にした大ぜいの群衆」とは、エルサレムの神殿を警護していたユダヤ人による役人たちです。ですから、400 人を超える大勢の人数が、普段は人影のないゲッセマネの園に集合して取り囲み、弟子たちはあまりの突然の情景に、慌てふためいたと思われます。

マタイはこの時の状況を「見よ」と指差して、何とイエス様を罪人の手に引き渡す首謀者が「十二弟子のひとり」だったと語っています。

「イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ。」と言っておいた。それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で。」と言って、口づけした。」(48-49 節)ユダは群衆が間違った人間を逮捕しないように、正確にイエス様を逮捕できるように一つの印を考案致します。口づけする、という行為は最も深い愛情を表す行為。それを裏切る印とするという技巧さです。この時、ユダが隠し通したつもりでも、イエス様は、ユダの邪悪な心は最初からご存知でした。しかし、イエス様はこの時、ユダの成すままにまかせられました。ユダが計画した通り、最高法院の議員たちが計画した通り、御自身を罪人たちの手に委ねられました。イエス様はこの時、裏切る者のキスをそのまま受けることを通して、父の御心に心から従おうとしておられたのです。この時、神の一人子に対して定められ、今ここに実現していく十字架への道程を、これから次々と起こってゆくイエス様への恐ろしい侮辱と暴力と罵りの数々と苦しみのを、主は自分の決断で選び取って行かれました。

「イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか。」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕えた。」(50 節)

しかも主はこの時ユダに向って「友よ」と語りかけて、主が尚も彼を愛していること。彼の救いを誰よりも願い、彼を赦そうと待ち構えている主であることを、この短い言葉の中に込めていたのではないのでしょうか。